THE MOON ART CONTEST VOL.18 受賞作品 ご紹介

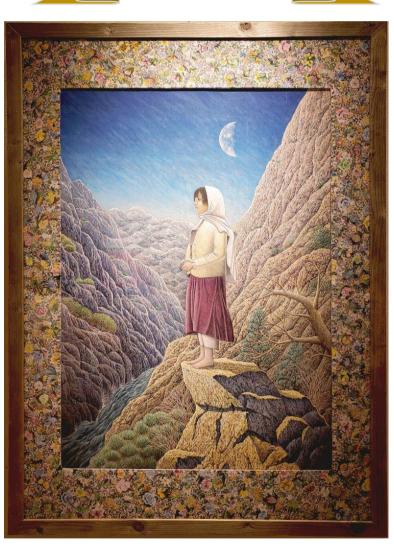
会期:2023年9月16日~10月15日

けいはんな記念公園 ギャラリー月の庭

審查員:京都芸術大学名誉教授 柴田純生 先生

京都芸術大学油画コース教授奥田輝芳先生

審査員 最優秀賞



『何処かで』横井吉之

【審杳評】

横井吉之さんの作品「何処かで」は、息の詰まるような密度が特徴的で思わず近付きたくなる作品です。細部まで描き込まれた点や短い線の集積で絵が出来上がっています。 それ故岩肌や草むらの表現は自然描写ではなくモチーフの光や影、空間感は無く平面的で、おられた絨毯のような図がそこにあります。しかしその執拗に手の入った静かなリズム感に我々は惹かれます。一歩踏み込んで細部を覗き込む面白さがこの作品のいちばんの魅力です。また、エックス構図の中心に少女が立っている象徴的な構成や、手描きのマットや額縁まで自作された周到な準備は作品をより引き立てています。ぜひまた拝見したいと思います。 審査員:奥田輝芳

審查員 準優秀賞



『白亜紀の月』 深澤一正

【審査評】

この作品は150×300cmを超える大作です。大きいことが必ずしも良い訳ではありませんが、 やはりまとめる力が無いと作品にはなりません。屏風仕立てにされた事で、見る側の視点や 方向でより大きな空間を感じさせる仕組みになっていて構想力を感じます。欲を言えば、 6枚のパネルの縁の部分をスッキリさせる、いわゆる作品の仕上げ、フィニッシュに意識を 注がれても良いかと思いました。月の表現に少し象徴性を持たせるなど全体のバランスでの 工夫ができそうですが、大きな画面をシンプルに扱うことのできる画力が審査で高く評価 されました。次の作品を期待しています。 審査員:奥田輝芳



『befriend』 岡 鯉太郎

【審査評】

鯉をモチーフしたインパクトの強い作品です。 錦鯉は日本独自の文化的存在です。品種改良を かさねた極彩色の様相はまさに生きる芸術と いえます。自然的と思えない改良も日本人の 独自な感覚や感性のあらわれであり、その独自な を表現対象にした作者の視点も独自なものであり、 を表現対象にした作者の視点も親鯉が月を感じ を表現がまたは彫刻された錦鯉が月をとともに 透明樹脂で封印され全体を一体化していなが 立体的、あるいは彫刻的に変わる重要な です。このサイズの透明樹脂の流し込みは 技術的挑戦であり勇気がいることです。 この勇気を次作にもつなげて下さい。

審查員:柴田純生

審查員 特別賞



『都会の月見』 鈴木安江

【審査評】

極めて特異な陶芸の作品です。むしろオブジェ焼きの領域を超え、彫刻と呼べるものです。 タタラの技法を基本にし、3次元空間を対象にすきま、間の要素を巧みに取り込んでいます。 焼成を必然とする焼き物の世界においことでいます。 焼成を必がします。 焼成を必ずしも完成したがいるといれり、 情者はこの必ずしも完成してであり、 意地とも思える意気とも思いるとせます。 和薬の扱いも常識にとものれずおいたも 領域を確立しようとのような展開を見ない。 が楽しみです。 くれるのでしょうか。次作が楽しみです。

審查員:柴田純生